

いまはむかし、たけとりの翁といふもの有けり。野山にまじりて竹をとりつゝ萬の事につかひけり。名をばさるきのみやつことなんいひける。其たけの中に、もとひかるたけなん一すぢありけり。あやしがりてよりて見るにつゝの中ひかりたり。それをみれば、三寸ばかりなる人いとうつくしうてあたり。おきないふやう「我、朝ごと夕ごとにみるたけの中におはするにて知ぬ。子に成給ふべき人なめり」とて手にうち入て家へもちてきぬ。めの女にあづけてやしなはず。うつくしき事限なし。いとをさなければこに入てやしなふ。竹とりのおきな、たけを取に、此子を見つけて後に竹とるに、ふしをへだてゝよごとにこがねあるたけをみつくる事かさなりぬ。かくておきなやう／＼ゆたかに成行。此兒やしなふ程にすく／＼とおほきになりまさる。三月ばかりになる程によき程なる人になりぬれば髪あげなどさうして、かみあげさせもぎす。ちやうのうちよりも出さずいつきやしなふ。此兒のかたちのけそうなること世になく屋のうちはくらき所なくひかりみちたり。おきな、心ちあしくくるしき時も、この子を見れば、くるしき事もやみぬ。はらだゝしき事もなぐさみけり。翁、竹をとる事久く成ぬ。いきをひまうのものに成にけり。此子いとおほきに成ぬれば、名を、みむろといむべのあきたをよびてつけさす。あきた、なよ竹のかぐや姫とつけつ。此程、三日うちあげあそぶ。萬のあそびをぞしける。男はうけきはらず、よひほどへいとかしこくあそぶ。世界のをのこ、あてなるもいやしきも「いかで此かぐや姫をえてしがな。見てしがな」と音にきゝ、

めでゝまどふ。そのあたりのかきにも家のとにも、をる人だにたはやすく見るまじき物を、よるはやすきいもねずやみの夜に出てもあなをくじりかひまみ、まどひあへり。さる時よりなんよばひとはいひける。人のをとせぬ所にまどひありけ共、何のしるしあるべくも見えず。家の人どもに物をだにいはんとていひかくれ共ことゝもせず。あたりをはなれぬ君たち、夜をあかし日を暮すおほかり。をろかなる人は、ようなきありきはよしなかりけりとてこずなりにけり。其中に猶いひけるは、色好といはるゝ限五人、思ひやむときなくよるひる來りけり。その名ども、石つくりの御子、くらもちのみこ、左大臣あべのみむらじ、大納言大伴のみゆき、中納言いそのかみのもろたり、此人々なりけり。世中におほかる人をだに、すこしもかたちよしときゝては、見まほしうする人どもなりければ、かぐや姫を見まほしうて、物もくはずおもひつゝかの家に行てたゝみありきけれど、かひあるべくもあらず。文をかきてやれ共返事もせず。わびうたなどかきてをこすれ共。かひなしと思へど、霜月、しはすのふりこほり、みな月のてりはたゞくにもさはらずきたり。此人々ある時は竹とりをよび出て、むすめを我にたべと、ふしおがみ手をすりの給へど、をのがなさぬ子なれば心にもしたはずなんあるといひて月日すぐす。かゝれば此人々家にかへりて物をおもひ、いのりをし、願をたつ。思ひやむべくもあらず。さりとともつゐに男あはせざらんやはと思ひて頼をかけた。あながちに心ざしを見えありく。是をみつけて翁、かぐや姫にいふやう「我子の佛、變

化の人と申ながらこゝらおほきさまでやしなひ奉る心ざしをろかなならず。おきなのお申さん事聞給てむや」といへば、かぐや姫「何事をかの給はんことはうけたまはらざらん。へんげのものにて侍けん身共しらずおやとこそ思ひ奉れ」といふ。翁、嬉しくもの給ふ物哉といふ。「翁、年、七十にあまりぬ。けふともあすともしらず。此世の人は、男は女にあふ事をす。女は男にあふことをす。其後なん、門ひろくもなり侍る。いかでか、さる事なくてはおほせん」かぐやひめのいはく「なんでうさることかし侍らん」といへば「變化の人と云共女の身もちたまへり。翁のあらん限はかうてもいますがりなむかし。此人々の年月をへてかうのみいましつゝの給ふ事を思ひさだめてひとり／＼にあひ奉給ね」といへばかぐや姫いはく「『よくもあらぬかたちを、ふかき心もしらであだ心つきなば、後くやしき事もあるべきを』と思ばかり也。『世のかしこき人なり共、ふかき心ざしをしらではあひがたし』となん思」といふ。翁いはく「おもひのごとくもの給かな。抑、いかやうなるこゝろざしあらん人にかあはんとおぼす。かばかり心ざしをろかならぬ人々にこそあめれ」かぐやひめのいはく「なに計のふかきをか見んといはん。いさゝかの事也。『人の心ざしひとしかん也。いかでか中にとりまさりは知ん。五人の中にゆかしき物をみせ給へらんに、御心ざしまさりたりとてつかうまつらん』とそのおはすらん人々に申給へ」といふ。よき事なりとうけつ。日くるゝ程、れいのおつまりぬ。或は笛をふき或は哥をうたひ或はしやうがをし或はうそをふき扇をなら

しなどするに翁出ていはく、「『忝なくきたなげ成所に、年月をへて物し給事、きはまりたるかしこまり』と申。『翁の命、けふあすともしらぬを、かくの給君たちにもよく思ひ定てつかうまつる』と申も理也。『いづれもとりまさりおはしまさねば御心ざしの程は見ゆべし。つかうまつらん事はそれになんさだむべき』といへば『これよき事也。人のうらみもあるまじ』といふ」五人の人々もよき事なりといへば翁いりていふ。かぐや姫、石つくりの御子には「佛の御石のはちと云物あり。それを取て給へ」といふ。くらもちの御子には「東の海にほうらいと云山あるなり。それに、しろかねをねとし、金をくきとし、白き玉をみとしてたてる木あり。それ、一枝おりて給はらん」と云。今獨には「もろこしにある火ねずみのかはぎぬをたまへ」大伴の大納言には「たつのくびに、五色にひかるたまあり。それをとりて給へ」いそのかみの中納言には「つばくらめのもたるこやすの貝取て給へ」と云。翁「かたきことにこそあなれ。此國に有物にもあらず。かかたき事をばいかに申さん」と云。かぐや姫、何かかたからんといへば、翁、とまれかくまれ申さむとていひ、「かくなむ。聞ゆるやうに見給へ」といへば、御子たち、上達部聞て「おいらかに、あたりよりだになありきそとやはの給はぬ」といひてうんじて皆歸ぬ。猶、此女見では世にあるまじき心ちのしければ、天竺に有物ももてこぬ物かはと思ひめぐらして、石つくりの御子は、こころのしたくある人にて「天竺に二となきはちを、百千萬里の程いきたりともいかでか取べき」と思ひて、かぐ

や姫のもとには「けふなん天ぢくへ、石のはちとりにまかる」ときかせて三年ばかり、大和の國、とをちのこをりにある山寺にびんずるのまへなるはちのひたぐろにすみつきたるをとりてにしきのふくろに入れて作り花の枝につけてかぐやひめの家にもてきてみせければ、かぐや姫あやしがりて見ればはちの中に文あり。ひろげて見れば

うみ山の道に心をつくし果ないしのはちの涙ながれき

かぐやひめ、光やあると見るに、ほたるばかりの光だになし。

をく露の光をだにもやどさまし　をぐら山にて何もとめけん

とて返しいだす。はちを門にすてゝこの哥のかへしをす。

しら山にあへばひかりのうするかとはちをすてゝも頼まるゝかな

とよみて入たり。かぐやひめ、かへしもせず成ぬ。耳にも聞いれざりければいひかゝづらひ

て歸りぬ。彼、はちをすてゝ又いひけるよりぞ、おもなきことをば、はちをすつるとは云ける。くらもちの御子は、心たばかりある人にて、おほやけには、つくしの國にゆあみにまからんとていとま申て、かぐや姫の家には、玉のえだとりになんまかるといはせて、くだり給に、つかふまつるべき人々みな難波まで御送りしける、御子いと忍びてとの給はせて、人もあまたゐておはしませず、ちかうつかふまつる限して出給ひ、御送りの人々み奉をくりてかへりぬ。おはしませぬと人には見え給ひて、三日ばかりありてこぎかへり給ぬ。かねてこと皆仰たりければ、其時、ひとつのたからなりけるかちたくみ六人を召とりて、たはやすく人よりくまじき家を作りてかまどを三へにしこめてたくみらを入給つゝ御子もおなじ所に籠り給て、しらせ給たる限十六そをがみにぐとをあげて玉の枝を作り給。かぐや姫の給ふやうにたがはず作り出つ。いとかしこくたばかりて難波にみそかにもて出ぬ。船にのりて歸りきにけりと殿につげやりて、いといたくるしがりたるさましてみ給へり。迎へに人おほく参たり。玉の枝をばながびつに入て物おほひてもちて参る。いつか聞けん、くらもちの御子はうどんぐゑの花もちてのぼり給へりとのしりけり。是をかぐや姫きゝて、我は此御子にまけぬべしと、むねつぶれて思ひけり。かゝる程に門をたゞきて、くらもちの御子おはしたりとつぐ。旅の御姿ながらおはしたりといへばあひ奉る。「御子の給はく『命をすてゝかの玉のえだもちて來るとてかぐやひめにみせ奉り給へ』」といへば翁もちていりたり。此たま

のえだに文ぞついたりける。

いたづらに身はなしつ共 たまの枝をたをらでさらに歸らざらまし

これをも哀とも見でをるに竹とりの翁はしり入ていはく「此御子に申給ひしほうらいのたまのえだを、ひとつの所あやまたずもおはしませり。何をもちとかく申べき。たびの御すがたながら、わが御いゑへもより給ずしておはしましたり。はやこの御子にあひつかうまつり給へ」といふに物もいはずつらづゑをつきていみじくなげかしげにおもひたり。此御子、今さへ何かといふべからずと云まゝにえんにはひのぼり給ぬ。翁理に思ふ。「此國に見えぬ玉の枝なり。此度はいかでかいなび申さん。人ざまもよき人におはす」などいひゐたり。かぐや姫のいふやう「おやの給ふことをひたぶるにいなび申さむ事のいとおしさに、取がたき物をかくあさましくもて來る事をねたく思ひおきなば、ねやの内しつらひなどす」翁、御子に申やう「いかなる所にか此木は候けん。あやしくうるはしくめでたき物にも」と申。御子こたへての給はく「さおとゝしのきさらぎの十日比に難波より船にのりて海の中に出て、いかな方もしらずおぼえしかど、思ふことならで世中にいきて何かせんと思ひしかばたゞむなしき風にまかせてありく。『命しなばいかゞはせん、いきてあらん限かくありきて、ほう

らいといふらん山にあふや』とうみにこぎ、たゞよひありきて、わが國のうちはなれてありきまかりしに、ある時は波あれつゝ海のそこにも入ぬべく、ある時には風につけてしらぬ國に吹よせられて、鬼のやうなる物出きてころさんとしき。ある時にはきしかた行すゑもしらずうみにまぎれんとしき。ある時にはかてつきて草のねをくひ物としき。ある時はいはん方なくむくつけげなる物きてくひかゝらんとしき。ある時にはうみの貝をとりにて命をつぐ。旅のそらにたすけ給べき人もなき所に色／＼のやまひをして行方空もおぼえず、船のゆくにまかせて海にたゞよひて五百日と云たつ時ばかりにうみの中にはつかにやま見ゆ。舟の内をなんせめてみる。海の上にとゞよへるやまいとおほきにてあり。その山のさま高くうるはし。是やわがもとむる山ならむと思ひてさすがにおそろしくおぼえて山のめぐりをさしめぐらして二三日ばかり見ありくに、天人のよそほひしたる女、山の中より出てしるかねのかなまるをもちて水をくみありく。是をみて船よりおりて、此山の名を何とか申ととふ。女こたへていはく、これはほうらいの山なりとこたふ。是をきくに、嬉しき事限なし。此女、かくの給は誰ぞととふ、我名はうかんるりといひてふとやまの中に入ぬ。其やま見るにさらのぼるべきやうなし。其やまのそばひらをめぐれば、世中になき華の木共たてり。金、しろかね、るりいろの水、山より流出たる、それには色々の玉のはしわたせり。其あたり、てりかゝやく木ども立り。其中に此とりてもちてまうできたりしはいとわろかりしかども、の



給しにたがはましかばと此花を折てまうで来る也。山は限なく面白し。世にたとふべきにあらざりしかど、此枝をおりてしかばさらに心もとなくて舟にのりて、追風吹て、四百餘日になんまうできにし。大願力にや難波より昨日なむ都にまうできつる。さらに、しほにぬれたる衣だにぬぎかへなでなん、こちまうできつる」との給へばおきなきつてうちなげきてよめる。

吳竹の世々のたけとり 野山にもさやはわびしきふしをのみ見し

是を御子聞て、こゝらの日比おもひわび侍つる心はけふなむおちみぬるとの給ひて返し。

わがたもと けふかはければ わびしさの千ぐさのかずも忘れぬべし

との給。かかる程に男ども六人つらねて庭に出きたり。一人の男、ふばさみに文をはさみて申。「くもんづかさのたくみあやべのうちまろ申さく『玉の木を作りつかふまつりしこと、五こくをたちて千餘日に力をつくしたる事すくなからず。然にろくいまだ給はらず。是を給て、わろきけこに給せん』」と云てさげたる、竹とりの翁、此たくみらが申ことは何事ぞ

とかたぶきををり。御子は、われにもあらぬけしきにてきもきえみ給へり。是をかぐや姫聞て、此奉る文をとれといひて、見れば文に申けるやう

御子の君、千日、いやしきたくみらともろ共におなじ所に隠み給て、かしこき玉の枝をつくらせ給ひて、つかさもたまはんとおほせ給ひき。是を此比安ずるに、御つかひとおはしますべきかぐや姫のえうじ給ふべきなりけりと承て。此みやよりたまはらん。

と申て、たまはるべきなりと云を聞て、かぐやひめ、くるゝまゝにおもひわびつる心ちわらひさかへて翁をよびとりていふやう「誠ほうらいの木かところ思ひつれ。かくあさましき空ごとにてありければはや返し給へ」といへば、翁こたふ。「さだかにつくらせたる物ときゝつれば、かへさん事いとやすし」とうなづきををり。かぐや姫の心ゆきはてゝ、ありつる哥のかへし。

まことかと聞て見つれば　ことのはをかざれる玉の枝にぞありける

と云てたまのえだもかへしつ。竹とりの翁、さばかりかたらひつるがさすがにおぼえてねぶ

りをり。御子は、たつものはした、あるものはしたにて給へり。日の暮ぬればすべり出給ぬ。彼うれへせしたくみをばかぐやひめよびすへて、嬉しき人どもなりと云てろくいとおほくとらせ給ふ。たくみらいみじくよろこびて、思ひつるやうにもあるかなと云て歸る道にてくらもちの御子、ちのながるゝまで調ぜさせ給ふ。ろくえしかひもなく皆取捨させ給てければにげうせにけり。かくて此御子は「一しやうのはぢ、是に過るはあらじ。女をえずなりぬるのみにあらず、天下の人のみ思はん事のはづかしき事」との給ひてたゞ一所、ふかき山へ入給ひぬ。みやづかさ、さぶらふ人々みな手をわかちてもとめ奉れども、御しにもやし給ひけん、えみつけ奉らずなりぬ。御子の、御ともにかくし給はんとて年比見え給はざりける也けり。是をなむ玉さかるとはいひはじめける。左大臣あべのみむらじは、たからゆたかに家ひろき人にておはしける、其年きたりけるもろこし船のわうけいといふ人のもとに文をかきて、火ねずみのかはと云成物かひてをこせよとて、つかふまつる人の中に心たしかなるをえらびて小野のふさもりと云人をつけてつかはす。もていたりて彼、唐にをるわうけいに金をとらす。わうけい、文をひろげてみて返事かく。

火ねずみのかは衣、此國になき物也。音にはきけどもいまだ見ぬ物也。世に有物ならば此國にもてまうできなまし。いとかたきあきなひ也。然共、若天竺にたまさかにもて

渡りなば、若長者のあたりにとぶらひもとめん。なき物ならば、使にそへて金をばかへし奉らん。

といへり。彼もろこし船きけり。小野ふさもりまうできてまうのぼると云ことをきゝて、あゆみとうする馬をもちてはしらせてかへさせ給ふ。ときに、馬にのりてつくしよりたゞ七日にまうできた。文を見るにいはく

火ねずみのかは衣からうじて、人をいだしてもとめ奉る。今の世にも昔の世にも此かはたやすくなき物なりけり。「むかし、かしこき天ぢくのひじり、此國にもてわたりて侍りける、にしの山寺にあり」と聞及て、おほやけに申てからうじてかひとりてたてまつる。あたいの金すくなしとこくし、使に申しかば、わうけいが物くはへてかひたり。いま金五十兩給はるべし。舟の歸らんにつけてたびをくれ。もしかね給はぬ物ならば彼衣のしち返したべ。

といへる事をみて「なにおほす。今かね少にこそあなれ。嬉しくしてをこせたる哉」とてもろこしの方にむかひてふしおがみ給ふ。「此かはぎぬいれたる箱を見れば、くさくさのうる

はしきるりを色えてつくれり。かはぎぬをみればこんじやうのいろ也。けのすゑには金の光しさゝやきたり。寶と見えうるはしき事、ならぶべき物なし。火にやけぬ事よりもけうらなる事限なし。うべかぐや姫このもしがりに給にこそありけれ」との給てあなかしことて箱に入給てものゝ枝につけて御身のけさういといたくして、やがてとまりなん物ぞとおぼして哥よみくはへてもちていましたり。其哥は

かぎりなき思ひにやけぬかは衣 袂かはきてけふこそはきめ

といへり。家の門にもていたりて立り。たけとり出きてとりいれてかぐや姫にみす。かぐやひめのかはぎぬを見ていはく「うるはしきかはなめり。わきて誠のかはならん共しらず」竹取答ていはく「とまれかくまれ先しやうじ入たてまつらん。世中に見えぬかは衣のさまなれば、是をとおもひ給ひね。人ないたくわびさせ給奉らせ給そ」といひてよびすへ奉れり。「かくよびすへて、此度は必あはん」と女の心にも思をり。「此翁は、かぐやひめのやもめなるをなげかしければ、よき人にはあはせんと思ひはかれど、せちにいなといふ事なればえしひねば、理也」かぐや姫、翁にいはく「此かは衣は火にやかんにやけずはこそ、誠ならめと思ひて、人のいふ事にもまけめ。世になき物なればそれをまことうたがひなく思はんと給ふ、

猶これをやきて心見ん」と云。翁、それさもいはれたりと云て、大臣に、かくなん申と云。大臣こたへていはく「此かははもろこしにもなかりけるをからうじてもとめ尋えたるなり。何のうたがひあらん。さは申ともはややきて見給へ」といへば、火の中にうちくべてやかせ給に、めらくとやけぬ。「さればこそ。ことものゝかは也けり」と云。大臣、是を見給て、顔は草の葉の色にてみ給へり。かぐやひめはあな嬉しとよろこびてゐたり。かの讀給ひける哥の返し、箱にいれて返す。

名残なくもゆとしりせば　かは衣　思ひのほかにをきてみましを

とぞありける。されば歸いましにけり。世の人ぐ「あべの大臣、火ねずみのかはぎぬもていましてかぐや姫にすみ給ふとな。こゝにやいます」などとふ。ある人のいはく「かはゝ火にくべてやきたりしかばめらくとやけにしかばかぐや姫あひ給はず」と云ければ、是を聞てぞ、とげなき物をばあへなしと云ける。大伴のみゆきの大納言は、我家にありと有人あつめての給はく「たつのくびに、五色の光ある玉あなり。其をとりて奉たらん人にはねがはん事をかなへん」との給。おのこ共、仰のことを承て申さく「仰の事はいとまたうとし。たゞし此玉たはやすくえとらじを」「いはんや龍のくびにたまはいかゞとらん」と申あへり。大

納言の給ふ。「君のつかひといはん物は、命をすてゝもをのが君の仰ごとをばかなへんとこそ思へけれ。此國になき天竺、もろこしの物にもあらず。此國の海山よりたつはをりのぼる物也。いかに思ひてかなんぢら、かたき物と申べき」おのこども申やう「さらばいかゞはせん。かたき物なり共仰ごとにしたがひてもとめにまからん」と申に大納言みわらひて「なんぢらが君の使と名をながしつ。君のおほせ事をばいかがはそむくべき」との給ひて、たつのおびの玉とりにとて出したて給ふ。此人々の道のかて、くひ物に殿の内のきぬ、わた、ぜになどある限とり出てそへてつかはず。「此人々ども歸までいもゐをしてわれはをらん。此玉取えでは家にかへりくな」との給はせけり。各仰承てまかりぬ。「たつのくびの玉とりえずは歸くなどの給へば、いづちもく、足のむきたらんかたへいなむず」「かかるすき事をしたまふ事」とそしりあへり。給はせたる物各分つゝとる。或はをのが家にこもりぬ或はをのがゆかまほしき所へいぬ。おや君と申ともかくつきなき事を仰給事とことゆかぬ物ゆへ大納言をそしりあひたり。かぐや姫すへんにはれいやうには見にくしとの給ひて、うるはしき屋を作り給てうるしをぬり、まきゑしてかべし給ひて、屋の上には、糸をそめて色々ふかせてうちくのしつらひには、いふべくもあらぬ綾をり物にゑをかきて誠はりたり。もとのめどもは、かぐや姫を必あはんまうけして、ひとりあかし暮し給。つかはしし人は、よるひるまぢ給ふに、年こゆるまで音もせず。心もとながりて、いと忍びてたゞとねり二人、めしつぎ

としてやつれ給て難波の邊におはしましてとひ給ふ事は、「『大伴の大納言の人や、船にのりて龍ころしてそがくびの玉とれる』とや聞」とはするに、舟人答ていはくあやしき事哉とわらひて、さるわざするふねもなしとこたふるに、「をぢなき事する船人にもあるかな。えしらでかくいふ」とおぼして「わが弓の力は、たつあらばふといころしてくびの玉はとりてん。をそくくるやつばらをまたじ」との給てふねにのりてうみごとによりき給ふに、いと遠くてつくしのかたのうみにこぎ出給ひぬ。いかゞしけん、はやき風吹て世界くらがりてふねをふきもてありく。いづれのかた共しらず、ふねを、海中にまかり入ぬべくふきまはして、波はふねに打かけつゝまき入、神は落懸るやうにひらめきかかるに大納言はまどひて「まだかゝるわびしきめ見ず。いかならんとするぞ」との給ふ。かちとり答て申。「こゝら舟にのりてまかりありくにまだかゝるわびしきめを見ず。みふね、海のそこにいらずはかみおちかゝりぬべし。若さいはひに神のたすけあらば南海にふかれおはしぬべし。うたてあるぬしのみもとにつかうまつりて、すじろなるしにをすべかめるかな」とかちとりなく。大納言、是を聞ての給はく「船に乗ては、かちとりの申事をこそたかき山とたのため、なかくたのもしげなく申ぞ」と、あをへどをつきての給。かち取こたへて申。「神ならねばなにわざをかつかうまつらん。風ふき、波はげしけれ共かみさへいたゞきに落かかるやうなるは、たつをころさんとともめ給候へばある也。はやてもりうのふかする也。はやかみにいのりたまへ」と云。



よき事也とて「かぢどりの御神きこしめせ。をどなく心をさなく、龍をころさむと思けり。今より後はけの一すぢをだにうごかしたてまつらじ」とよごとをはなちてたちみなくくよばひ給ふ事千度ばかり、申給ふけにやあらんやうく神なりやみぬ。少光て、風は猶はやく吹。かぢどりのいはく「是はたつのしわざにこそありけれ。此ふく風はよきかたの風なり。あしきかたのかぜにはあらず。よきかたにおもむきてふく也」といへ共大納言はこれを聞入給はず。三四日ふきてふきかへしよせたり。濱をみればはりまのあかしのはまなりけり。大納言、南海のはまにふきよせられたるにやあらんとおもひていきづきふし給へり。船にあるをのこ共、國につげたれども、國のつかさまうでとぶらふにもえおきあがり給はで船ぞこにふし給へり。松原に御むしろしきておろし奉る。其時にぞ、南海にあらざりけりと思ひてかうじておきあがり給へるをみれば、風いとおもき人にてはらいとふくれ、こなたかなたのめにはすもゝを二つけたるやう也。是を見奉りてぞ國のつかさもほうゑみたる。國におほせ給てたごしくらせ給ひてにようくになはれて家に入給ぬるを、いかでか聞けん、つかはししをのこ共參て申やう「龍のくびの玉をえとらざりしかば南殿へもえ參らざりし。玉の取がたかりし事をしり給へればなん、かんだうあらじとて參つる」と申。大納言おきみての給はく「なんぢらよくもてこず成ぬ。たつはなるかみのるいにこそ有けれ。それが玉をとらんとてそこらの人々のがいせられんとしけり。ましてたつをとらへたらましかば又こともなく

我はがいせられなまし。よくとらへずなりにけり。かぐや姫てふおほぬす人のやつが人をこるさんとする也けり。家のあたりだに今はとをらじ。をのこ共もなありきそ」とて、家に少残たりける物共は、たつのたまをとらぬ物共にたびつ。これを聞て、はなれ給ひしもの上ははらをきりてわらひ給ふ。絲をふかせ作りし屋はとび、からすの巢に皆くひもていにけり。世界の人のいひけるは「大伴の大納言はたつのくびの玉や取ておはしたる」「いな、さもあらず。みまなこ二にすもゝのやうなる玉をぞそへていましたる」と云ければあなたべがたといひけるよりぞ世にあはぬことをばあなたへがたとはいひはじめける。中納言いそのかみのまろたかの、家につかはるゝをのこ共のもとに、つばくらめの巢くひたらば告よとの給ふを承て、なにの用にかあらんと申。答ての給やう、つばくらめのもたるこやす貝をとらんれう也との給ふ。をのこ共こたへて申。「つばくらめをあまたころしてみるだにもはらになき物也。但『子うむときなん、いかでかいだすらんはらくか』と申。人だに見ればうせぬ」と申。又人の申やう「おほいつかさの、いひかしぐ屋のむねにつゝのあなごとにつばくらめは巢をくひ侍る。それにまめならんをのこ共をいてまかりてあぐらをゆひあげてうかぢはせんこそらのつばくらめ、子うまざらむやは。さてこそとらしめ給はめ」と申。中納言よろこび給て「をかしき事にもあるかな。もつともえしらざりけり。興ある事申たり」との給て、まめなるをのこども廿人ばかりつかはしてあななひにあげすへられたり。とのよりつかひ、隙な

く給はせて、こやすの貝とりたるかと問せ給ふ。「つばくらめも、人のあまたのぼりたるにおぢて巢にもものぼりこず」かかるよしの返事を申たれば、聞給て、いかゞすべきとおぼしわづらふに、彼つかさの官人、くらつまろと申翁申やう、こやすがいとらんとおぼしめさばたばかり申さんとて御前に參たれば、中納言、ひたいを合てむかひ給へり。くらつまろが申やう「此つばくらめ子やすがいはあしくたばかりてとらせ給ふ也。さてはえとらせ給はじ。あななひにおどろしく廿人の人ののぼりて侍ればあれてよりまうでこず。せさせ給べきやうは、此あななひをこぼちて人皆しりぞきて、まめならん人一人をあらこのせすへてつなをかまへて、鳥の子うまん間につなをつりあげさせてふとこやす貝をとらせ給はんなんよかるべき」と申。中納言の給やう「いとよき事也」とて穴ないをこぼし、人皆かへりまうできぬ。ちう納言、くらつま丸にの給はく「つばくらめはいかなる時にか子うむとしりて人をばあぐべき」との給ふ。くらつまろ申やう「つばくらめ、子うまむとする時はおをさゝげて七どめぐりてなむうみ落すめる。さて、七度めぐらんおりひきあげて其おり、こやすがいほとらせたまへ」と申。中納言よろこび給ひて、萬の人にもしらせ給はでみそかにつかさにいましてをのこ共の中にまじりてよるをひるになしてとらしめ給ふ、くらつまろかく申をいといたくよろこびての給。こゝにつかはるゝ人にもなきにねがひをかなふことの嬉しさとの給て御ぞぬぎてかづけ給ふつ。「さらによさり、このつかさにまうでこ」とのたまふてつかは

しつ。日暮ぬれば彼つかさにおはして見給ふに誠つばくらめ、巢つくれり。くらつまる申やう、をうけてめぐるにあらこに人をのぼせてつりあげさせてつばくらめの巢に手をさし入させてさぐるに物もなしと申に、中納言、あしくさぐればなき也とはらだちて、たればかりおぼえんにとて、われのぼりてさぐらんとの給ひてこにのりてつられのぼりてうかぢひ給へるに、つばくらめ、おをさげていたくめぐるにあはせて手をさゝげてさぐり給に手にひらめる物さはる時に「われ、物にぎりたり。今はおろしてよ。おきな、しえたり」との給て、あつまりてとくおろさんとてつなをひき過してつなたゆるすなはちにやしまのかなへの上へのけざまに落給へり。人々あさましがりてよりてかゝへ奉れり。御目はしらめにてふし給へり。人々水をすくひ入奉る。からうじていき出給へるに、又かなへの上より、手とり足取してさげおろしたてまつる。からうじて、御心ちはいかゞおぼさるゝとへばいきのしたにて「物は少おぼゆれどこしなんうごかれぬ。されど、こやす貝をふとにぎりもたれば嬉しく覺ゆる也。先しそくしてこゝの貝、かほ見ん」と御ぐしもたげて御手をひろげ給へるに、つばくらめのまりをけるふるぐそをにぎり給へる也けり。それを見給てあなかひなのわざやとの給ひけるよりぞ、思ふにたがふ事をばかひなしと云ける。かいにもあらずとみ給ひけるに御心ちもたがひて。からびつのふたにいられ給べくもあらず御こしはをれにけり。中納言は、いたいけしたるわざしてやむことを人にきかせじとし給ひけれど、それをやまひにていとよは

く成給ひにけり。貝をえとらず成にけるよりも、人のきゝわらはんことを、日にそへて思ひ給ければ、たゞに、やみしぬるよりも人聞はづかしくおぼえ給ふなりけり。是をかぐや姫聞てとぶらひにやる哥

年をへて波立よらぬすみのえのまつかひなしときくはまことか

とあるをよみてきかず。いとよはき心にかしらもたげて、人にかみをもたせて、くるしき心ちにからうじてかき給ふ。

かひはかくありける物を わびはてゝしぬる命をすくひやはせぬ

とかきはつる、たえ入給ぬ。是を聞てかぐや姫少あはれとおぼしけり。其よりなむ少嬉しき事をばかひありとはいひける。さて、かぐやひめ、かたちの世に似ずめでたき事をみかどきこしめして内侍なかとみのふさこにの給。おほくの人の身をいたづらになしてあはざるかぐやひめはいかばかりの女ぞと、まかりてみて参れとの給ふ。ふさこ承てまかれり。竹とりの家にかしこまりてしやうじいれてあへり。女に内侍の給。「仰ごとに、かぐや姫のかたちい

うにをはす也、よく見て参るべきよしの給はせつるになん、参つる」といへば、さらばかく申侍らんと云て入ぬ。かぐやひめに、はや彼御使にたいめんし給へといへば、かぐやひめ「よきかたちにもあらず。いかでか見ゆべき」といへば、「うたてもの給ふ哉。御門の御使をばいかでかをろかにせん」と云ば、かぐやひめの答るやう、御門のめしての給はん事かししとも思はずと云て、さらに見ゆべくもあらず。むめる子のやうにあれど、いと心はずかしげにをろそかなるやうにいひければ、心のまゝにもえせめず。女、内侍のもとに歸り出て「口おしく此おさなき物はこはく侍る物にてたいめんすまじきと申」内侍「必見奉りてまいれと仰ごとありつる物をみ奉らではいかでかかへりまいらん。國王の仰ごとを、まさに世に住給はん人の承たまはでありなんや。いはれぬことなし給ひそ」と、ことば恥しくいひければ、是を聞てましてかぐや姫きくべくもあらず。國王の仰ごとをそむかばはやころし給てよかしと云。此ないし歸り参りて此由を奏す。御門聞召て、おほくの人ころしてける心ぞかしとの給ひてやみにけれど猶おぼしおはしまして、此女のたばかりにやまけんとおぼしておほせ給ふ。「なんぢがもちて侍るかぐやひめ奉れ。かほかたちよしと聞召て御使たびしかどかひなく、見えず成にけり。かくだいしくやはならはすべき」と仰らる。翁かしこまりて御返事申やう「此めのわらはゝたへて、宮仕つかうまつるべくもあらずはんべるを、もてわづらひ侍。さりととも、まかりて仰給はん」と奏す。是を聞召て仰給ふ。「などか、翁のおほし

たてたらん物を心にまかせざらん。此女若奉りたる物ならば翁にかうぶりをなか給せざらん」翁よろこびて家に歸りてかぐや姫にかたらふやう「かくなん御門のおほせ給へる。なをやはつかうまつり給はぬ」と云ばかぐやひめ答ていはく「もはらさやうの宮づかへつかうまつらじと思ふをしゐて仕まつらせたまはゞ消うせなむず。みつかさかうぶり仕てしぬばかり也」おきないらふるやう「なし給そ。かうぶりも、わが子を見奉らでは何にかせん。さはあり共などか宮仕をしたまはざらん。しに給ふべきやうやあるべき」といふ。「猶そらごとかと仕らせて、しなずやあると見給へ。あまたの人の心ざしをろかならざりしをむなしくなしてしこそあれ、昨日けふ御門のの給はんことにつかん、人ぎゝやさし」といへばおきなこたへていはく「てんかのことはと有ともかゝりともみいのちのあやうさこそおほきなるさはりなれば、猶つかうまつるまじきことを参りて申さん」とて参て申やう「仰の事のかしこさに、かのわらはを参らせんとてつかうまつれば、宮仕にいだしたてばしぬべしと申。みやつこまろが手にうませたる子にてもあらず昔、山にて見つけたる、かかれば心ばせも世の人に似ず侍る」と奏せさす。御門仰たまはく「宮つこまろが家は山もとちかくなり。御かり、みゆきし給はんやうにてみてんや」との給はす。宮つこ丸が申やう「いとよき事也。何か。心もなくて侍らんにふとみゆきして御覽ぜん。御覽ぜられなん」とそうすればみかど俄日を定て御かりに出たまふてかぐや姫の家に入給ふて見給に、ひかりみちてけうらにてみたる人あり。

是ならんとおぼして、にげて入袖をとらへ給へば、おもてをふたぎて候へど、はじめて御覽じつれば、たぐひなくめでたくおぼえさせ給ひて、ゆるさじとすとてゐておはしまさむとするに、かぐやひめ答て奏す。「をのが身は此國に生て侍らばこそつかひ給はめ、いといておはしましがたくや侍らん」とそうす。みかど「なかさあらん。猶いておはしません」とて御こしをよせ給ふに此かぐや姫きとかげに成ぬ。はかなく口おしとおぼして、げにたゞ人にはあらざりけりとおぼして「さらば御ともにはいていかじ。もとの御かたちと成給ひね。それをみてだに歸りなん」と仰らるれば、かぐや姫、もとのかたちに成ぬ。御門、なをめでたくおぼしめさるゝ事せきとめがたし。かく見せつる宮つこまろをよろこび給。さて、仕まつる百官、人々、あるじいかめしうつかうまつる。御門、かぐやひめをとめて歸給はん事をあかず口惜おぼしけれど、玉しるをとめてたる心ちしてなむかへらせ給ひける。御こしに奉りて後にかぐやひめに

かへるさのみゆき物うくおもほえてそむきてとまるかぐや姫ゆへ

## 御返事



むぐらはふ下にも年はへぬる身の何かは玉のうてなをもみむ

是を御門御覽じていかゞかへり給はん、空もなくおぼさる。御心はさらに、たち歸べくもおぼされざりけれど、さりとして、よを明し給べきにあらねば、歸らせ給ぬ。つねにつかうまつる人を見給に、かぐやひめのかたはらによるべくだにあらざりけり。こと人よりはけうらなりとおぼしける人の、かれにおぼしあはずれば人にもあらず。かぐや姫のみ御心にかゝりてたゞひとりずみし給ふ。よしなく御かたゞにもわたり給はず、かぐやひめの御もとにぞ、御文をかきてかよはさせ給ふ。御かへりさすがににくからずきこえかはし給て、おもしろく木草につけても御哥をよみてつかはず。かやうにて御心をたがひになぐさめ給ふ程に三年ばかりありて春のはじめよりかぐや姫、月のおもしろう出たるを見てつねよりも物思ひたるさま也。ある人の「月、かほ見るはいむこと」とせいしけれ共、ともすればひとまにも月をみてはいみじくなき給ふ。七月十五日の月に出みて、せちに物思へるけしきなり。ちかくつかはるゝ人々竹とりの翁につげていはく「かぐやひめ、れいも月をあはれがりたまへども、此ごろと成てはたゞ事にも侍らざめり。いみじくおぼしなげく事あるべし。能々見奉らせ給へ」といふを聞てかぐやひめにいふやう「なんでうこゝちすれば、かく物をおもひたるさまにて月を見給ぞ。うましき世に」といふ。かぐやひめ「みればせけん心ぼそく哀に侍る、なでう

物をかなげき侍るべき」といふ。かぐや姫のある所に至りて見れば、猶物思へるけしきなり。是をみて「あがほとけ、何事思給ぞ。おぼすらん事、何事ぞ」といへば「思事もなし。物な心ほそくおぼゆる」といへば翁「月な見給そ。是を見給へば、物おぼすけしきは有ぞ」といへば、いかで月をみではあらんとて猶、月出れば出みつゝ歎思へり。夕やみには物思はぬけしき也。月の程に成ぬれば猶、時々は打なげきなきなどす。これをつかふ物ども、なを物おぼす事あるべしとさゝやけど、親をはじめて何事共しらず。八月十五日ばかりの月にいでゐてかぐやひめいといたくなき給ふ。人目も今はつゝみ給はずなき給ふ。是をみておや共も何事ぞと問さはぐ。かぐや姫なくく云。「さきぐも申さんとおもひしかども、必心まどはし給はん物ぞと思ひて今まですぎし侍りつる也。さのみやはとて打いで侍ぬるぞ。をのが身は此國の人にもあらず。つきの都の人也。それをなむ、昔の契有けるによりなん此世界にはまうできたりける。今は歸べきに成にければ此月の十五日にかのもの國よりむかへに人々まうでこんず。さらずまかりぬべければおぼしなげかむがかなしき事を此春より思ひなげき侍るなり」と云ていみじくなくを翁「こはなでうことをの給ぞ。竹の中より見つけ聞えたりしかど、なたねのおほきさをおはせしを、わかたけたちならぶまでやしなひ奉りたるわが子を何人かむかへきこえん。まさにゆるさんや」といひて、我こそしなめとてなきのゝしる事、いとたへがたげ也。かぐや姫のいはく「月の都の人にて父母あり。かた時のあひだとてかの

國よりまうでこしかどもかく此くにはあまたの年をへぬるになんありける。かのくにの父母のこともおぼえず。こゝにはかく久しくあそび聞えてならひ奉れり。いみじからん心ちもせずかなしくのみある、されど、をのが心ならずまかりなんとする」と云てもろ共にいみじうなく。つかはるゝ人も年比ならひて、たち別なむことを、心ばへなどあてやかにうつくしかりつる事を見ならひて、戀しからん事のたへがたくゆ水のまれず、おなじ心になげかしがりけり。この事を御門聞召て竹とりが家に御使つかはさせ給。御つかひに竹とり出あひて、なく事限なし。此事をなげくにひげも白くこしもかゞまり、目もたゞれにけり。翁、今年は五十ばかりなりけれども、物思ひにはかた時になん老に成にけりと見ゆ。御使、仰ごととて翁にいはいとこころぐるしく物思ふなるはまことにかと仰給ふ」竹とりなくく申。「此十五日になん月の都よりかぐやひめのむかへにまうでくなる。たうとくとはせ給ふ。此十五日は人々給りて、月のみやこの人まうでこばとらへさせん」と申。御使かへり参て翁のありさま申て、奏しつる事共申を、聞召ての給ふ。「一目見給ひし御心にだに忘給はぬに、明暮見なれたるかぐや姫をやりていかゞ思べき」彼十五日、つかさくゝに仰て敕使少將高野のおほくにといふ人をさして六衛のつかさあはせて二千人のひとをたけとりが家につかはす。家にまかりてついぢのうへに千人、屋の上に千人、家の人々おほかりけるにあはせて、あける隙もなくまもらす。此守る人くゝも弓矢をたいして、おもやの内には女ども、番におりてま

もらす。女、ぬりごめの内にかぐや姫をいだかへてをり。翁もぬりごめの戸さして戸口にをり。翁のいはく、かばかり守る所に天の人にもまけんやといひて、屋の上をる人々にいはく「露も物、空にかければふといころし給へ」まもる人々のいはく、かばかりして守る所にかはり一だにあらばまづいころして外にさらさんと思侍るといふ。おきな、是をきゝて頼もしがりをり。是を聞てかぐやひめは「さしこめてまもりたゝかふべきしたぐみをしたり共あの國の人をえたゝかはぬなり。ゆみ矢していられじ。かくさしこめてありとも、彼國の人こばみなあきなんとす。あひたゝかはんとす共、かの國のひときなば、たけき心つかう人もよもあらじ」翁のいふやう「御むかへにこん人をば、ながきつめてまなこをつかみつぶさん。さがゝみをとりにかなぐりおとさん。さがしりをかき出てこゝらのおほやけ人に見せてはぢを見せん」とはらだちをる、かぐや姫いはく「こはだかにの給そ。屋のうへにをる人どもの聞にいとまसानし。いますがりつる心ざしどもを思ひもしらでまかりなんずる事の口おしう侍けり。ながき契のなかりければ程なくまかりぬべきなめりと思ひかなしく侍也。おやたちのかへりみをいさゝかだにつかうまつらで、まからん道もやすくもあるまじきに、日比も出みてことしばかりのいとまを申つれど、さらにゆるされぬによりてなむ、かく思ひなげき侍る。御心のみまどはしてさりなん事のかなしくたへがたく侍る也。彼都の人はいとけうらに、おいをせずなん、思ふ事もなく侍る也。さる所へまからんずるもいみじく侍らず。

老おとろへ給へるさまをみ奉らざらんこそ戀しからめ」と云て翁「むねいたき事なし給そ。うるはしき姿したるつかひにもさはらじ」とねたみをり。かゝる程に宵打過て、ねの時ばかりに家のあたり、ひるのあかさにもすぎて光たり。もち月のあかさを十合せたるばかりにて、ある人のけの穴さへ見ゆる程なり。おほぞらより人、雲に乗ておりきて、つちより五尺ばかりあがりたる程にたちつらねたり。うちとなる人の心ども、物におそはるゝやうにて、あひたゝかはん心もなかりけり。からうじておもひおこして弓矢をとりたてんとすれ共手に力もなくなりてなへかかりたる中に心さかしきものねんじていんとすれ共ほかさまへいきければ、あれもたゝかはで心ちたゞしれにしれて守りあへり。たてる人どもはさうぞくのきよらなる事物にも似ず。とぶ車一ぐしたり。らがいさしたり。その中にわうとおぼしき人、家に、宮つこまろまうでこといふに、たけく思ひつる宮つこまろも、物にゑいたる心ちしてうつぶしにふせり。いはく「なんぢ、をさなき人、いさゝかなる功德を翁作りけるによりてなんぢがたすけにとてかた時の程とてくだししを、そこらの年ごろ、そこらのこがね給ひて、身をかへたるがごと成にたり」「かぐや姫は、つみを作り給へりければ、かくいやしきをのれがもとにしばしをはしつるなり。つみの限はてぬればかくむかふる、翁はなきなげくあたはぬ事也。はや返し奉れ」と云。翁答て申。「かぐやひめをやしなひ奉事、廿餘年になりぬ。かた時との給ふにあやししく成侍ぬ。又こと所に、かぐや姫と申人ぞをはしますらん」と云。こゝ

におはするかぐや姫はおもきやまひをし給へばえ出をはしますまじと申せば、其返事はなく  
て屋の上にとぶ車をよせて「いざかぐや姫、きたなき所にいかでか久しくおはせん」と云。  
たてこめたる所の戸すなはちたゞあきにあきぬ。かうし共も、人はなくしてあきぬ。女いだ  
きてゐたるかぐやひめ、とに出ぬ。えとゞむまじければたゞさしあふぎてなきをり。竹とり  
心まどひてなきふせる所によりてかぐやひめいふ。「こゝにも心にもあらでかくまかるに、  
のぼらんをだにみ送り給へ」といへども「何しにかなしきに見送奉らん。我をいかにせよと  
て捨てはのぼり給ふぞ。ぐしてゐておはせね」となきてふせれば御心まどひぬ。「文をかき  
をきてまからん。戀しからん折く取いで見給へ」とてうちなきてかくことばは

此國に生ぬるとならば、なげかせ奉らぬ程まで侍らで過別ぬる事かへすぐほいなくこ  
そ覺侍れ。ぬぎをくきぬをかたみとみ給へ。月の出たらん夜はみをこせたまへ。見すて  
奉りてまかる空よりも落ぬべきこゝちする。

とかきをく。「天人の中にもたせたるはこあり。あまのは衣いれり。又あるはふしの薬入り」  
ひとりの天人いふ。「つぼなる御くすり奉れ。きたなき所の物きこしめしたれば御心ちあし  
からん物ぞ」とてもてよりたればいさゝかなめ給ひて少かたみとてぬぎをくきぬにつゝまん

とすればある天人つゝませず。御ぞをとり出てきせんとす。其時にかぐやひめしぼしまてと云。「きぬきせつる人は心ことに成なりと云。物、一こといひをくべき事有けり」といひて文かく。天人をそしところもとなり給。かぐや姫、物しらぬことなの給ひそとていみじくしづかにおほやけに御文奉り給ふ。あはてぬさま也。

かくあまたの人を給ひてとゞめさせ給へど、ゆるさぬむかへまうできてとりいてまかりぬれば口おしくかなしき事。宮仕つかうまつらず成ぬるも、かくわづらはしき身にて侍れば、心えずおぼしめされつらめども、心つよく、承らずなりにし事。なめげなる物におぼしめしとゞめられぬるなん心にとまり侍ぬ。

とて

今はとてあまのは衣きる折ぞ君を哀と思ひ出ける

とてつぼのくすりそへて頭中じやうよびよせて奉らす。中じやうに天人取てつたふ。ちうじやうとりつればふとあまのは衣うちきせ奉りつれば、翁をいとおしかなしとおぼしつる事も

うせぬ。此きぬきつる人は物思ひなく成にければ車に乗て百人ばかり天人ぐしてのぼりぬ。其後、翁、女、ちの涙をながしてまどへど、かひなし。あのかきをきし文をよみてきかせけれど「なにせんにか命も惜からん。たがためにか。何事もようもなし」とて薬もくはずやがておきもあがらでやみふせり。中じやう、人々ひきぐしてかへり参て、かぐや姫をえたゝかひとめずなりぬるこまぐと奏す。薬のつぼに御文そへてまいらす。ひろげて御覽じていとあはれがらせ給ひて物もきこしめさず御あそびなどもなかりけり。大臣、上達部をめして、いづれの山か天にちかきとゞはせ給に、ある人そうす。「するがの國にあるなる山なん、この都もちかく天もちかく侍る」とそうす。是をきかせ給て

あふ事も涙にうかぶ我身にはしなぬくすりも何にかはせん

かのたてまつるふしのくすりに又つぼぐして御使にたまはず。敕使には月のいはかさと云人をめして、するがの國にあなる山のいたゞきにもてつくべきよしおほせ給。みねにてすべきやうをしへさせ給ふ。御文、ふしのくすりのつぼならべて火をつけてもやすべきよしおほせ給ふ。その由承てつは物どもあまたぐしてやまへのぼりけるよりなん其山をふじの山とは名づける。そのけぶりいまだ雲のなかへ立のぼるとぞいひつたへたる。